

「管理会計と数理計画」の特集に当って

渡 辺 浩

1. 特集テーマへの到達

組織体における意志決定への参画を主題とするORの活動において、周辺領域との関連は常に重要な関心事であるが、標記の特集テーマもその1つと見ることもできよう。これがいつかは本誌において取り上げるに値するテーマであることは、以前から筆者の意識の中にあったが、この数年来何人かの会計学者と個人的に面識を得たことと、それらの人々を通じて最近の会計の動向について若干の見聞の機会を得たこととによって、標記のテーマの特集に関する編集委員会からの委嘱に応ずることができるかと考えた次第である。

ところで「～とOR」式の特集テーマは今まで何回か本誌で取り上げられたことがあるが、今回のテーマがそれと同じ性格のものと言えるかについては若干の議論の余地がある。経済計画とORとか、交通運輸とOR、という時に意図されている両者の関係は明白であるが、標記テーマの場合には少し違う。

管理会計の機能は経営における管理と意志決定のための組織内における情報の提供にある、というような表現にふれてそのまま受けとめると、それはORの目ざしていることとどこが違うのか、という疑問さえ湧いてくる。しかし両者はその発

生の根元からずっと違った発想に支えられており、その間には表面的な言葉の類似によっては越えることのできない溝が存在している、という考えが、むしろ多くの人々の心底に潜んでいるとも考えられる。

これに対し、これだけ類似した目標を掲げているとすれば、過去の経過にもとづくどんなに深い溝も、1世代後には埋められてしまうに違いないとの見方もできる。

2. 特集の構想

さて本特集を引き受けるに当ってその内容として考えた事項は、座談会の中でもふれているように、大きく4つに分けられる。

1) 組織体で数理計画を実施する場合に、そのためのデータの提供者としての管理会計の役割りは、モデルの内容に即した形でうまく機能しているだろうか？

2) 数理計画の結果として得られる管理上有益な情報、たとえばシャドウ・プライスなどは、組織内で有効に活用されているだろうか？

3) 大規模な数理計画問題、分解理論、分権的管理、階層的意志決定システム、等に関する最近の理論的發展に即した、現実的な計画システムのあり方と機能、その可能性についてはどうか？

4) 管理会計分野からの問題意識による、数理計画の方法を使った新しい概念の導入と理論的展

開の状況はどうか？

3. 内容について

これらについては座談会の中で論議するとともに、個別の寄稿をお願いした。

佐藤氏の「管理会計情報の意思決定モデル適合性」は、1)のテーマについて管理会計学者の側から直接論じていただいたものである。

御船氏の「モデルの切り口」は特集テーマ全般について実務家の側から、数多くの計画モデルの経験を土台として、論じていただいたものであるが、とくに、1)以前のモデル化の段階と、1)、2)に直接関連する側面が大きい。

青沼氏による「多階層計画システムと計画調整」は3)のテーマに関する数理計画専門家の立場からの氏自身の業績をふまえた展望になっていて、最近の理論的發展の内容を要約的に知ることができる。単に演算手続きの問題でなく、収束以前の段階で実施しうる現実性のある計画過程が重視されている点に注目していただきたい。

門田氏の「予算編成過程と目標計画法」は4)の1つの側面を代表するものであり、その中では行動科学的視点の重視が目だっている。4)の別の側面としては、座談会の後半での伊丹氏の発言に注目していただきたい。ここでも行動科学的視点の重視が目だっている。

4. 特集をまとめ終って

まとめ終っていくつかの点に気づくが、1つは現実の企業の内における数理計画担当者与管理会計家との役割りの関係については、座談会での御船氏の発言から知れるように、少なくとも装置工業においてはかなり分離していて、最初に述べた言葉から感じられるような意味での重複はなく、

データ提供の面でも、全面的依存関係ではないということである。そしてそれは“会計データは基本的に実績データであり、計画は実績データ以外にもとづくものではない、と要約できるようである。

これを、分析におけるデータの客観性を重視して、あくまで実績データに限定する場合に経済の激動期において計量経済学者が経験する問題と共通の問題として議論するのは、過度の飛躍であるかも知れないが、管理会計と数理計画の両者の間に、補完的よりは排他的な関係を感じる伊丹氏の意見に耳を傾けるときも、忘れてはならない視点であろう。

他方モデル化の過程に対する管理会計分野からの積極的発言も目立ち、その中で行動科学的視点の重視の声の強いことは、筆者の当初の予想を上回るものであった。

管理会計と数理計画が、今やアカデミックな研究の領域ではほとんど一体化しようとしているのに、現場では両者の関係は遠く離れている、という現状についての福川氏の指摘には傾聴すべきものがあるだろう。しかし管理会計が学界でこれだけ大きな変化の波を経験したとき、教育を通じてそれが10年を経ないうちに、現実の場での反映を見ないと予想することは困難だろう。

この特集に当って日本の管理会計分野の先端を代表される俊秀諸氏のご協力を得たことを感謝する次第である。

× × ×

× × ×